

## 第1回 高津川河床掘削懇談会 議事要旨

日 時：平成27年2月27日(金) 13:00～15:00

場 所：益田市立水防センター

出席者：赤松委員、石川委員、井上委員、広瀬委員、村山委員（50音順）

（オブザーバー 斎藤氏（高津川漁業協同組合））

会議資料： ・議事次第

- ・第1回 高津川河床掘削懇談会 出席者名簿
- ・「高津川河床掘削懇談会」設立趣旨
- ・高津川河床掘削懇談会規約（案）
- ・【資料-1】昨年度までの検討経緯について
- ・【資料-2】モニタリング調査結果について
- ・【資料-3】段階施工の実施について

議事要旨：

<懇談会規約について>

- ・懇談会規約を承認し、会長に広瀬委員を選出。

<昨年度までの検討経緯について>

（委員）

- ・エンコウの瀬において、H25.7出水後は瀬の部分に土砂が堆積しているが、次のH25.8出水後はその土砂が流されている。同規模の洪水であれば同様の傾向を示すように思う。このあたりの原因についても確認しておいてほしい。

<モニタリング調査結果について>

（委員）

- ・産卵適性度の評価基準について、今年度のデータが適用できないのは理解したが、今後も基準の見直しは行わないということか。

（事務局）

- ・今後もモニタリング調査は継続し、必要に応じて見直しを検討していく予定。

（委員）

- ・産卵分布の調査結果について、他の年と比べてH24のエンコウの瀬の調査範囲が狭いのは何故か。

（事務局）

- ・H24は島根県水産技術センターの調査結果を使用しており、他の年度のようにメッ

シュウ状の調査は実施していない。

(委員)

- ・それを踏まえて、H25 と H26 の産卵範囲を比べると H26 がかなり減っているようだが、物理条件で見ると悪くなっていない。何故か。

(委員)

- ・親の個体数が減ったことと、産卵時期と調査時期のずれによるもの。

(委員)

- ・親魚の個体数と産卵場の環境の組合せ等により、川としてのアユの生産力を評価する方法はないのか。

(委員)

- ・過去からの経験則としての数値はあるが、物理環境が変化すると適用できなくなると考えられる。

(委員)

- ・昨年度は台風の影響で産着卵が流されてしまい、今年度は親魚が少ない状況となった。そのため、入漁者が減少し、逆に生き延びた親は大きく成長する結果となった。

<段階施工の実施について>

(委員)

- ・摩擦速度により河床形状の安定性を評価しているが、無次元値での評価の方が工学的には適正。高水敷の構成材料はいずれの箇所においても大きく変化しないので、現在の評価方法で問題はないが、念のため、無次元掃流力による評価についても考えてみてほしい。

(事務局)

- ・試験施工における埋め戻しについてはどう思われるか。

(委員)

- ・堆積土砂は砂と泥が多いため、それで埋めてもすぐ掘れてしまうのではないか。

(事務局)

- ・掘削土砂はふるい分け等を行い、現在の河床材料と同等のものにして埋め戻す前提と考えている。

(委員)

- ・S22年頃のような礫河原を目指すのか。

(事務局)

- ・治水対策を重視しており、流下能力を維持することを目的とすると、結果的に S22 年頃の河道を目指すこととなる。

(委員)

- ・高津川では複数の瀬淵が連続した環境となっている。試験工区 1 箇所です淵を埋め戻す影響はさほど大きくない印象である。

(委員)

- ・昨年度、ナガタの瀬付近の竹林を伐採したことにより、従来実施していた産卵場造成を行う必要が無いほど良い状態になった。漁業者としては、樹木は伐採してもらった方がありがたい。

(委員)

- ・樹木伐採を行った後、樹木が生えない断面を維持することが大事。除根や、草が生えた段階で切って維持する等の対策が必要。

(委員)

- ・高津川の樹林化は、大きな洪水に依存していると考えられることから、平均年最大流量での評価だけではなく、より大きな規模の洪水での評価が必要ではないか。

(事務局)

- ・計画流量での予測、30 年間の長期予測も実施し、現状より悪化しないことを確認している。

(委員)

- ・現在は山林環境の変化により山林からの土砂流入量が昔と比べると少なくなっている。そういった河川内だけでなく周辺環境の影響もあるため、昔の河川の復元は非現実的な印象を受ける。ただし、西益田大橋付近は、荒れた竹林に近い状態となっているため、今回の試験施工で、より良い植生環境になるのではないかと思われる。

(委員)

- ・高津川の流量は減少傾向にあるため、冠水することを期待して掘削した箇所で冠水しないという可能性がある。そのため、より小規模な流量でシミュレーションを行っておくことも必要ではないか。

<まとめ>

(会長)

- ・試験施工の実施にあたり、専門家の意見を踏まえて検討を進めるが、基本的な考え方については妥当であるという意見でよいか。

(委員一同)

- ・よい。

(事務局)

- ・今後の予定としては、来年度から 3 年程度かけて中流部で掘削を行う予定。また、モニタリング調査を継続し、調査結果は今後の懇談会で報告する。

以上